

「ノーボーイズ、ノークライ」

☆☆☆

2009（平成21）年7月29日鑑賞＜角川映画試写室＞

監督：キム・ヨンナム

脚本：渡辺あや

亨（家族思いの若者）／妻夫木聡

ヒョング（ボートで荷物を運ぶ若者）／八・ジョンウ

チス（誘拐された少女）／チャ・スヨン

奈美（亨の妹、隆の妻）／徳永えり

ボギョンおじさん／イ・デヨン

敦子（亨の元恋人）／貫地谷しほり

隆（ボギョンおじさんの息子）／柄本佑

雑貨店の店主／あがた森魚

2009年・日本、韓国映画・114分

配給／ファントム・フィルム

＜脚本依頼を受けた渡辺あや氏のチャレンジは？＞

本作のチラスには日本のビッグネーム妻夫木聡、『チェイサー』（08年）（『シネマルーム22』242頁参照）でがぜん人気を得た韓国の若手スター、八・ジョンウと並んで、「脚本：渡辺あや」の名前がある。これは製作会社が2005年に日韓合作映画を企画した際、脚本を渡辺あやに依頼し、監督を韓国人でというプランをたてたことによって実現したためだ。渡辺あやは『ジョゼと虎と魚たち』（03年）や『メゾン・ド・ヒミコ』（05年）の脚本家として有名だが、この企画では「ラブストーリーはやめてくれ」との注文があったらしい。それを受け入れた結果渡辺あやが書いた脚本は、かなりヘンな世界に生きる、かなりヘンな日韓の若者2人の心の中に迫るもの。もちろんストーリーはあるのだが、それはあってないようなもの・・・？

アンデルセン作の『人魚姫』は有名だが、なぜか本作でも人魚が重要な役割で登場し、弟だけを連れて行った母親に見捨てられた一方の主人公ヒョング（八・ジョンウ）の孤独な心を表現する役割を担っている。他方、2009年のNHK大河ドラマ『天地人』でいかにも知的な直江兼続役を演じている妻夫木聡が、これ以上悲惨な家族はないのでは、というほど悲惨な家族関係の中でのたうち回る主人公亨を演じている。

韓国側の注文に答えようとする渡辺あや脚本のチャレンジは理解できるのだが、さてその出来のレベルは？また、観客の満足度は？

＜タイトルの意味を噛みしめながら・・・＞

本作の英題は『The Boat～no boys, no cry～』。そして、映画の冒頭に登場するヒョングの密航シーンによって、メインタイトルである「Boat」の部分が描かれる。北朝鮮から日本への密航者がどれくらいいるのか知らないが、韓国からもこんな風にと簡単にヒョングがボギョンおじさん（イ・デヨン）にキムチ（？）を定期的に運んでくることのできるのなら、日本はかなりいい加減な国？

他方、邦題である「ノーボーイズ、ノークライ」は原題のサブタイトルを使ったものだが、これは中学生レベルの英語力があればわかる。つまり直訳すれば、「泣かない男の子はいない」だが、こりゃ一体ナニ？どんな意味？日本で唯一の共産党知事として1950年から1978年まで7期28年間も京都府知事をつとめた蜷川虎三氏が就任当初に唱えた「15の春は泣かせない」とのキャッチフレーズは有名だが、本作における日韓の両主人公亨とヒョングはいつも泣いてばかり？いやいや、そんなことはないはず。だって男はぐっと涙をこらえる生きモノのはずだから？さあ、そんなタイトルの意味を噛みしめながら、ストーリーをじっくりと・・・。

＜誘拐事件のカラクリはイマイチ？＞

一見善良そうに見える（？）ボギョンおじさんは実はワル。したがって、ヒョングがボートに乗せて運んでいたのは実はキムチではなく麻薬だったことがすぐにわかってくる。ところが、それ以上にヤバいのは、生身の人間を「荷物」として運べと命じられたこと。もちろんヒョングがそれを拒否することができないのがつらいところだが、その荷物とは、実は韓国人の美少女チス（チャ・スヨン）だったから大変。

チスの父親は保険会社の重役でボギョンと組んで会社の金を横領していたらしいが、その父親が姿を消してしまったから大事件に。そこでボギョンが動いたわけだが、その後映画はチスの争奪戦を軸としてかなりややこしい展開になっていく。そこで残念なのは、この誘拐事件のカラクリがイマイチであること。チスは「パパを見つけてくれたら5000万円ずつあげる」と亨とヒョングに叫ぶのだが、それに対する亨のスタンスは？そしてヒョングのスタンスは？

＜家族ぐるみの逃避行の展開とその行方は？＞

本作にはボギョンの息子隆（柄本佑）とその妻奈美（徳永えり）が登場するが、前半では彼らと亨との関係がイマイチ不明で、奈美が亨の妹であると判明するのはかなり後になってから。しかも、隆と奈美の間に3人の子供がおり、彼らは認知症の祖母と共に漁村の一軒家に住んでいるがそれぞれ大きな問題を抱えていることや、この家族の面倒をみているのが隆ではなく亨であることがわかるのは映画中盤になってからだ。そしてこの時点ではヒョングは「どうしても金が必要だ。そのためにはチスの父親を捜し出さなければ！」という亨の策謀（？）に乗せられているから、否応なく亨と行動を共にすることに。

そこで必然的になったのが、こんな悲惨な家族全員を引き連れてのボギョンからの逃避行。『ディファイアンス』（08年）は、山の中でナチスドイツの追跡から何年間も逃げ続けたユダヤ人3兄弟の姿を描いた感動作だった（『シネマルーム22』109頁参照）が、もともと何の信頼関係もない亨とヒョングによる、悲惨な家族全員を引き連れての逃避行の展開とその行方は？

＜「カラオケ大会」シーンの可否は？曲目選択の可否は？＞

主君上杉景勝への忠誠を誓う妻夫木聡演ずる直江兼続も、策士豊臣秀吉からアプローチをかけられたりして大変だったが、隆に代わって悲惨な家族の世話を焼き、金のためにヒョングと共に逃避行を続けている亨も大変。そんな亨の内面を妻夫木聡がいかに演ずるかが本作の興味の1つだが、さて亨がブチ切れるシーンでの妻夫木聡の演技力は？

他方、亨たちが仮住まいを決めたマンスリーマンションのカラオケ大会の舞台に立つのが亨。なぜそんな事態になったのか、またなぜそこにヒョングが登場するのかは、あなた自身の目で確認してほしいが、そこで2人が歌うのがPUFFYの『アジアの純真』。2人がこの3分以上あるフルバージョンを歌うシーンは本作の1つのハイライトだが、さてその可否は？また、日韓合作映画で『アジアの純真』という曲目を選択したことの可否は？プレスシートの中で渡辺あや氏は「私は結構日和見で難癖つけられるとあっさり妥協することも多いのですが、この曲についてはどうしても譲れませんでした。単純にこの曲がいいから！というのもあったのですが、反対理由の寒々しい感じになじめなかったのだと思います」と述べているが、さてその真意は？

＜えっ！こんなテイスト？えっ！これで終わり？＞

若手ながら既に日本映画界の大スターとなった妻夫木聡と『チェイサー』の大ヒットで大スターとなった八・ジョンウの異色の共演と、渡辺あやの脚本が売りの本作だが、本作全体は「えっ！こんなテイスト？」と思うものが多い。その最大のポイントは、亨とヒョングの心の中の問題をどう描き、どう浮かびあがらせるかだが、ストーリー的にはヒョングが亨に騙されているのか、それともボギョンに騙されているのかも大問題。その結果ラスト近くになると亨とヒョングのつかみ合いの大ゲンカのシーンも登場するが、さてその勝敗は？体格や腕力からみれば当然ヒョングの勝ちと思うのだが、それでは妻夫木聡に失礼？すると、そこから生まれる必然の結末は？

それはそれでわかるのだが、私がわからないのは本作のラスト。いつの頃からか芽生えてきた亨、ヒョング間の男の友情（信頼）がラストにはある譲り合いの形で登場するが、さてその結末は？私だけではなく、きっとあなたも「えっ！これで終わり？」と思うのでは・・・？そして、そこに登場する大切なキャラがアンデルセンの「人魚姫」ならぬ人魚。さあそんな本作をあなたはどうか評価？